

廣池千九郎に対する疑問——「超越」をめぐる——

川久保 剛

廣池千九郎の教えを学び、研究していくと、深く共感し、強く啓発される一方で、いくつかの疑問点も当然うまれてくる。

わたしとしては、それらの疑問点をないがしろにせず、むしろ、それを掘り下げること、一研究者としての責務を果たしていきたいと考えている。

そこで今回は、「超越」をめぐる廣池千九郎の立場に疑問を呈してみたい。ここで「超越」というのは、神、仏、天など人間を超越した存在を意味する。

さて廣池千九郎が、そうした「超越」の意志、廣池千九郎の言葉では「神意」を明らかにしようとしたことは今更いうまでもないであろう。廣池千九郎において「神意」は「自然の法則」とも言い換えられ、その内容は「最高道徳」を実行するものは、永続的な安心・平和・幸福を得ることが出来るという点にある。では、その「最高道徳」とは何かということ、それは人類の教師である「聖人」たちに共通する教えであり、一言でいえば「慈悲寛大自己反省」の心づかいであると説かれている。

こうした教え自体は素晴らしいと思うし、人類全体が「慈悲寛大自己反省」の心を大切にできるようになれば、世界に永続的な安心、平和、幸福が訪れることは確かであろう。わたしも全面的に賛成である。ただ、わたしは、廣池千九郎の教えの前提に疑問を持つのである。つまり、それがどうして「神意」であるのか、と。廣池千九郎は、一体全体、どうして「神意」が把握できるのか。「神」は、人間を「超越」した存在である。それゆえ、本来であれば、人智では把握できない存在、人間の知性を超えた、ある意味で人間にとって不可知な存在であるはずだ。そうした存在の意志、つまり「神意」をどうして、廣池千九郎は理解し、人間の言語で表現することが出来るのか。わたしは、この点に、やはり疑問を向けざるを得ないのである。

ところで、こうした疑問は、何もわたしだけのものではない。また廣池千九郎にのみ向けられるものでもない。むしろそれは、超越性・宗教性を根本原理とするあらゆる教えにおいて共通に問題となる一大テーマであるといえよう。たとえば思想家の福田恆存は、キリスト教の教説に対して次のように疑問を投げかけている。

原始キリスト教に対しては、違和感を持ちません。いまのキリスト教は、私には非常に疑問ですね。と言いますのは、あまりにも神学、ことにトマス・アクィナスの神学——まあ、これはもとはアリストテレスの思想から持ってきたんでしょ、アリストテレスの場合には、自然という言葉をつかっており、自然は目的を持っていて、その目的がなんであるかをアリストテレスは規定していませんよ。その自然の、あるいはその背後にあるものの目的、意志をトマスが明確に規定してしまったと言えないでしょうか。つまり…人間は、たとえトマス・アクィナスであろうと、やはり何物かに表現されている、うしろから何かが動かしている、その何かの存在を信じるのが宗教でしょう。が、トマスは、その自分たちを動かしているものがなんであるかを知るために、うしろをふり返って、私たちが動かしているのはこういうものだと規定してしまったんです。そこに私は非常な疑問を持っているんです。…一度うしろをふり返って、その全貌を見きわめてしまったら、せっかくうしろにあった不可知なものが自分の前に来てしまって、神意がわかりきったものになってしまう。つまり普通のものと同じになっちゃうし、自分の支配下に属してしまいます。神意は自分の支配できないもの、自分には何かわからないもの、というのは、私は、原始キリスト教にあったと思うんです。（『井上洋治対談集・ざっくばらん神父と13人』）

福田は、キリスト教の精神に共感を示しつつも、その合理的体系化である神学に対して以上のような疑問を呈しているのである。そしてわたしは、この福田の疑問を、廣池千九郎にも向けてみたいのである。

人智を超えた存在の意志について人間がどうして語りうるのか、という疑問に加え、果たして「神意」について人間が語って良いものだろうか、という疑問もある。つまり福田も指摘しているように、ある対象を理解するということは、ある意味で、その対象を支配可能な存在にする、ということであるから、そこでは神よりも人間が上位の存在となってしまう。そうすると、自我意識を持った人間の宿命として、「神意」を理解しているという自負に由来する自己優越感や選民

意識が生まれる。それが、ともすれば、「神意」に関する正統と異端をめぐる争いを生み出してしまふ。また、そもそも、「神意」と思ったものが実は「神意」ではなかった、廣池千九郎の理解した「自然の法則」と実際の「自然の法則」との間に実は齟齬、矛盾が存在した、というような場合も論理的には想定可能であろう。いずれにせよ、「神意」を知的に規定してしまう態度は、人間の傲慢に結びつく可能性を含んでいる。

そうした意味で、次の福田恆存の言葉は傾聴に値するといえよう。

もっと謙虚に、人間にとっては不可知のものがあると考えた方がよい。…何かわれわれのうかがい知れないものがある。…われわれは、自分を押し出している背後の自然の目的というものを理解することはできないのです。それを、生意気にも、そういうものが分かると思ったら大間違いです。その何ものかの存在というのは、神と言おうと、天と言おうと、どういう言葉を使ってもいいけれども、そういうものは人間には分からないし、何のために自分を生ぜしめて動かしているのかということも分からない。
（『人間の生き方、ものの考え方』）

ここに「超越」との向き合い方をめぐる一つのありうべき態度が開示されているといえよう。「超越」は、知的対象化が不適切なもの、と捉える立場である。「超越」は、こころで感じ取るもの、と捉える立場とも言い換えられようか。いわゆる修善寺の大患の後の心境をつづった夏目漱石の次の言葉も、そうした立場に含めることができよう。

無力な自分に、周辺の人たちが非常に好意をもって手を差しのべてくれる。お医者さん、看護婦さん、友だち、そして弟子の一人ひとりが好意をもって接してくれる。その背後に、何か、宇宙がものを育てるような力があるのを感じる。自分はそこで生まれたのだ。（『思い出すことなど』）

人間にとって、自己を超えたところに、「何か」大いなるものの存在を感じつつ、その大いなる「何か」を合理的に規定することを保留する態度は、人間としての謙虚さを失わずに生きて行くための賢明な知恵といえるかもしれない。

もっとも、廣池千九郎とく福田＝漱石の立場は、ともに、今ここで描き出したほど単純な対立図式で説明できるような浅薄、皮相のものではないだろう。もう一步、思索のレベルを深めると、むしろ共通の位相が新たに見えてくるかもしれない。

ただここでは、廣池千九郎にたいする、ひとつのありうべく疑問を、ともかくも、一度、それとして、提出させて頂いたまでである。

今後も、廣池千九郎に、さまざまな疑問をぶつけながら、思索を深め、そのことによって廣池千九郎に関する豊かな研究・議論空間の構築に参画していきたいと念願している。

参考文献

- ・ 欠端實『宇宙の心、自然の心——廣池千九郎に学ぶ生き方』（廣池学園出版部、1995年）
- ・ 水野治太郎「転換期の最高道德論」（『季刊モラロジー生涯学習』141号、廣池学園出版部、1997年）